




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 <b>2788</b> 号	氏名	福嶋 敬愛
審査担当者	主査	矢野 博久	
	副主査	光山 慶一	
	副主査	鶴田 修	
主論文題目： Estimation of the Number of Metastatic Lymph Node in Dukes C' Colorectal Cancer (Dukes' C 大腸癌における転移リンパ節個数の評価)			

### 審査結果の要旨（意見）

大腸癌において癌の壁内の深達度とリンパ節転移は非常に重要な予後規定因子であると言われている。リンパ節転移から予後を予測するにあたり、転移リンパ節の場所や郭清リンパ節に対する転移リンパ節の割合などが重視されていた。本研究では、551例という多数の大腸癌症例を用いて転移リンパ節の個数を指標にして予後との関連を明らかにすることを試みている。その結果、リンパ節転移の個数が5個以上であれば、有意に4個以下の場合に比べ予後が悪いことを明らかにしている。本研究は、郭清リンパ節の場所や割合など関係なく、転移リンパ節の個数の測定だけで予後評価が可能という簡便な予後評価の方法を確立した研究であり、学位論文として極めて価値の高いものであると判断する。

### 論文要旨

大腸癌の進行度分類は、腫瘍の壁深達度とリンパ節転移度によって決定される。本研究では、進行度分類に強い影響力を持つリンパ節転移度のカットオフ値の妥当性を検討した。1985年から2007年の間に当教室で治癒的切除された551例の大腸癌患者のデータ（年齢の中央値：65歳、直腸症例：182例（33%））を分析した。転移リンパ節個数（Metastatic lymph node number (MLN)）ごとにグループを形成し、それぞれの予後を比較し、適当なカットオフ値を設定した。そして、新しいカットオフ値の予後規定因子としての妥当性を検討した。1症例についての転移リンパ節個数の中央値は2個であった。生存率と再発率は、転移リンパ節個数別に、1～4個、5個～7個、8個以上に大別された。特に  $MLN \leq 4$  と  $MLN \geq 5$  で分類した場合、5年生存率は  $MLN \geq 5$  は  $MLN \leq 4$  に比べて有意に不良であった ( $p < 0.0001$ )。Cox 比例ハザードモデルを用いた多変量解析でも、予後を規定する因子として、 $MLN \geq 5$  が独立した予後不良因子として選択された (hazard ratio : 1.84 95% confidence interval: 1.2801-2.6295  $p = 0.0012$ )。以上の結果より、 $MLN \geq 5$  は、大腸癌患者にとって、予後を規定する因子であることが示唆された。